

『後山詩話』 訳注稿 (三)

北宋・陳師道 著

青木沙弥香・竹澤英輝・許山秀樹
松尾肇子・三野豊浩・矢田博士 訳注

〔解題〕

本誌第十五号に続いて、北宋・陳師道の『後山詩話』の訳注稿である。本号には、全八十四節のうち、第四十六節から第七十節までを掲げる。

〔凡例〕

◇ テキストは、清・何文煥輯『歷代詩話』（中華書局、一九八一年四月第一版）を底本とした。

◇ 底本で校異が示されている部分については、原文に「校一」、「校二」……と付してその箇所を示し、「校異」の項目を設けて訳出した。

◇ 【訓読】の項目の書き下し文については、漢字の読み（ルビ）は現代仮名遣いを、送り仮名は旧仮名遣いを用いた。

四十六

莊荀皆文士而有學者。其「説劍」「成相」「賦篇」、
與屈「騷」何異。

【訓読】

莊・荀は皆な文士にして学有る者なり。其の「説劍」
「成相」^{せいしやう}「賦篇」は、屈の「騷」と何ぞ異ならんや。

【語釈】

* 莊荀：ともに戦国時代の思想家。道家の莊周（莊子）と儒家の荀況（荀子）のこと。

* 「説劍」：『莊子』雑篇に見える篇名。賦によく見られる、賓客と主人との問答形式で書かれている。

*「成相」「賦篇」：「成相」「賦篇」は、ともに『荀子』の篇名。賦によく見られる、賓客と主人との問答形式で書かれている。

*屈騷：戦国時代・楚の屈原の「離騷」のこと。賦の源泉的な作品とされる。

【通釈】

莊子と荀子はいずれも文章家でしかも学問のある人である。『莊子』の「説劍」、『荀子』の「成相」「賦篇」の諸作品は、屈原の「離騷」とどうして違いがあるろうか。

四十七

揚子雲之文、好奇而卒不能奇也。故思苦而詞艱。善爲文者、因事以出奇。江河之行、順下而已。至其觸山赴谷、風搏物激、然後盡天下之變。子雲惟好奇。故不能奇也。

【訓読】

揚子雲の文は、奇を好むも卒に奇なること能はざるなり。故に思ひは苦にして詞は艱なり。善く文を爲る者は、事に因りて以て奇を出だす。江河の行くは、順下するのみ。其の山に触れ谷に赴き、風搏ち、物激するに至りて、然る後に天下の変を尽くす。子雲は惟だ奇を好む

のみ。故に奇なること能はざるなり。

【語釈】

*揚子雲：前漢・揚雄のこと。子雲はその字。

*思苦：「思」は、ここでは言葉によつて表される思想、つまり内容のこと。「苦」は、難解であること。

*江河之行：長江や黄河の流れのこと。

*風搏：風に巻きあがること。

*物激：物にぶつかること。

*盡：きわめること。

【通釈】

揚雄の文は、奇抜さを好むものの結局のところ奇抜な表現を作れないでいる。それゆえ、内容は分かりにくく、言葉は難しい。上手に文章を書く者は、目にした事物によつておのずと奇抜な表現を生み出すのである。大河の流れはおのずと低い方向に向かっていくだけである。山に行き当たり谷に赴き、風に巻き上がり、物にぶつかりあつて、そのようにしてはじめて、さまざま変化を極めるのである。揚雄はただ奇抜さを好むだけなのである。だから奇抜な表現が作れないのである。

四十八

歐陽公謂退之爲樊宗師志、便似樊文。其始出于司馬

子長爲「長卿傳」如其文。惟其過之。故兼之也。

【訓読】

歐陽公 謂へらく、退之 樊宗師の志を為り、便ち樊の文に似たり、と。其の始めは、司馬子長 「長卿の伝」を為りて其の文の如きより出づ。惟だ其の之に過ぐるのみ。故に之を兼ねるなり。

【語釈】

* 歐陽公謂：「歐陽公」は、北宋・歐陽脩のこと。「謂」以下の言葉は、歐陽脩の「論尹師魯墓誌」（『文忠集』卷七十三「外集二十三」）の以下の言葉に基づく。—— 修見韓退之與孟郊聯句、便似孟郊詩。與樊宗師作誌、便似樊文。慕其如此。（修 韓退之の孟郊と聯句するを見るに、便ち孟郊の詩に似たり。樊宗師の与に誌を作れば、便ち樊の文に似たり。慕ふこと其れ此くの如し。）——

* 退之：唐・韓愈のこと。退之はその字。

* 樊宗師志：「樊宗師」は、唐の人。字は紹述。韓愈と親しく、金部郎中・綿州刺史・絳州刺史などを歴任した。「志」は、墓誌銘を指して言う。ここでは、韓愈の「南陽樊紹述墓誌銘」を指す。その墓誌銘によれば、樊宗師には『魁紀公』三十卷・『樊子』三十卷・『春秋集傳』十五卷といった著作のほか、表や牋、説や論などの散文が合わせて二百九十一篇、諸々の銘が二百二十篇、賦が十篇、詩が七百十九篇あったと言ふ。ただし、今に伝わるのは、「絳守居園池記」と「蜀綿州越王樓詩并序」（『全唐詩』卷三六九）の二篇のみである。その文は難解であつたらしく、例えば、『四庫全書總目』卷一五〇「絳守居園池記註一卷」にも、「文僻澀不可句讀（文は僻澀にして句読すべからず）」

と指摘する（清水茂著『唐宋八家文』、朝日新聞社、中国古典選35、第一冊一五五頁、参照）。

* 司馬子長・前漢・司馬遷のこと。子長はその字。

* 長卿伝：『史記』の司馬相如伝のこと。長卿は、司馬相如の字。

* 惟其過之：「其」は文章の書き手、ここでは韓愈と司馬遷を指す。「之」は、志や伝に書かれる側の人物、ここでは、樊宗師と司馬相如を指す。「過」は、力量が越えていること。

【通釈】

歐陽脩は次のように評して言つた。韓愈が樊宗師の墓誌銘を作ると、樊宗師の文に似たものができあがつた。と。こうした例は、前漢の司馬遷が司馬相如の伝を書いたとき、司馬相如の文のようになったことに始まる。ただ書く側の力量が書かれる側の力量よりも勝つていただけである。それゆえ書かれる側の文体をも兼ねることができたのである。

四十九

退之以文爲詩、子瞻以詩爲詞。如教坊雷大使之舞。雖極天下之工、要非本色。今代詞手、惟秦七黃九爾。唐諸人不迨也。

【訓読】

退之は文を以て詩を為り、子瞻は詩を以て詞を為る。教坊の雷大使の舞の如し。天下の工なるを極むと雖も、要は本色に非ざるなり。今代の詞手は、惟だ秦七と黄九のみ。唐の諸人は迨ばざるなり。

【語釈】

*退之：唐・韓愈のこと。退之はその字。

*子瞻：北宋・蘇軾のこと。子瞻はその字。

*教坊雷大使：「教坊」は、宮廷の音楽を管理する役所。「雷大使」は、雷中慶のこと。初めは舞の名手として民間で活躍していたが、後に教坊に採用されることになった。南宋・蔡條の『鐵圍山叢談』巻六に、以下のようにある。――教坊琵琶則有劉繼安、舞有雷中慶。世皆呼之爲雷大使。（教坊の琵琶には則ち劉繼安有り、舞には雷中慶有り。世皆な之を呼びて雷大使と爲す）。――なお、同じく『鐵圍山叢談』では、雷大使が教坊に採用された時期を宣和年間（一一一九～一二二五）としており、これが陳師道の卒年である建中靖国元年（一一〇一）より後であることから、『後山詩話』を陳師道の作とすることに對して、疑問視する説がある（『四庫全書總目』卷一九五「集部・詩文評類一」『後山詩話一卷』を参照）。

*非本色：「本色」は、本来のありよう、の意。南宋・胡仔は、「本来のありようではない」とする陳師道の評語に對して、「言い過ぎだ」と反論している。『苕溪漁隱叢話』後集卷二十六「東坡」に、以下のように入る。――余謂後山之言過矣。（余謂へらく、後山の言は過ぎたり、と）。――

*秦七：北宋・秦觀のこと。「七」は排行。同族の同世代に属する者に数

字を付して、その長幼の順を表した。

*黄九：北宋・黄庭堅のこと。「九」は排行。

【通釈】

韓愈は文を作るように詩を作り、蘇軾は詩を作るように詞を作った。いずれも宮廷の音楽所に仕える雷大使の舞のようである。巧みさにおいて天下に名を極めているとはいえ、結局はその道の本来のありようではない。今世で詞の作り手と言えるのは、秦觀と黄庭堅だけである。唐の詞人たちは彼らに及ばない。

五十

韓退之「上尊號表」曰、「析木天街、星宿清潤、北嶽醫閭、神鬼受職」。曾子固「賀赦表」曰、「鉤陳太微、星緯咸若、崑崙渤澥、波濤不驚」。世莫能輕重之也。後當有知之者。

【訓読】

韓退之の「尊号を上るの表」に曰く、「析木天街、星宿清潤たり。北嶽醫閭、神鬼職を受く」と。曾子固の「赦を賀するの表」に曰く、「鉤陳太微、星緯咸

若し、崑崙、渤海、波濤、驚かず」と。世能く之を軽重する莫きなり。後、当に之を知る者有るべし。

【語釈】

- *韓退之：唐の韓愈のこと。退之はその字。
- *「上尊號表」：正確な題は、「請上尊號表」。
- *析木天街：「析木」「天街」は、いずれも星の名。
- *星宿：星のやどり。星座。

- *北嶽：河北省曲陽県の西北にある恒山。
- *醫閭：遼寧省北鎮県の西にある山の名。
- *受職：官職を授けられること。
- *曾子固：北宋・曾鞏のこと。子固はその字。
- *「賈赦表」：正確な題は、「賀熙寧十年南郊禮畢大赦表」。
- *鈞陳太微：「鈞陳」「太微」は、いずれも星座の名。
- *星緯：星座。
- *咸若：帝王の教化を頌える言葉。
- *崑崙：中国の西の果てにある山の名。
- *渤海：中国の東のはてに面した海の名。
- *軽重：優劣・甲乙などを判断すること。

【通釈】

唐の韓愈の「尊号を上るの表」に次のように言う。「析木の星、天街の星、天空をめぐる星座はみな清らかに潤い輝く。北の山岳、醫閭の山、そこに住まう鬼神たちも天子様から官職を授けられる」と。北宋の曾鞏の「赦を賀するの表」に次のように言う。「鈞陳という名の星座、

太微という名の星座、天空をめぐる星座はみな天子様の教化を頌え、西の果ての崑崙の山、東の果ての渤海の海、この太平の世に波も穏やかである」と。今の世には両者の甲乙を判断できる者がいない。後世、きつとそれを判断する者が現れるにちがいない。

五十一

國初士大夫例能四六、然用散語與故事爾。楊文公刀筆豪贍、體亦多變、而不脫唐末與五代之氣。又喜用古語、以切對爲工。乃進士賦體爾。

歐陽少師始以文體爲對屬、又善叙事、不用故事陳言而文益高、次退之云。王特進暮年奏亦工、但傷巧爾。

【訓読】

国初の士大夫 例ね四六を能くするも、然れども散語と故事とを用ふるのみ。楊文公は刀筆 豪贍にして、体も亦た多変なるも、而れども唐末と五代の氣を脱せず。又た喜んで古語を用ひ、切對を以て工と為す。乃ち進士の賦の体なるのみ。

歐陽少師 始めて文の体を以て對屬と為し、又た善く

事を叙し、故事・陳言を用ひずして文は益ます高く、退之に次ぐと云ふ。王特進の暮年の表奏も亦た工なるも、但だ巧に傷はるるのみ。

【語釈】

* 四六：四字句と六字句の対句を基調とした文体。四六文と言う。宋代には公文書の筆記に用いられた。そのため北宋の初期の科挙の試験では、四六文の力量が要求された。

* 散語：散文。ここでは、平仄などの韻律面での制約のない言葉を使うか。ちなみに、第六十五節では、「韻語」と相対する言葉として用いられている。

* 楊文公：楊億、字は大年のこと。淳化三年(九九二)の進士。翰林学士、兼史館修撰などを歴任し、死後、文と諡された。当時の文壇の領袖として劉筠・錢惟演らと詩歌を唱和し、それらの詩をまとめて『西崑唱集』を編集した。彼らの詩は、唐の李商隱を尊び、修辭に凝つたその詩風は、「西崑体」と称された。

* 刀筆：奏議・制誥などの公文書のこと。

* 豪贍：豪放で雄厚なさま。

* 切對：対句の一種。「的名對」「正名對」「正對」とも言う。空海の『文鏡秘府論』東卷には、「二十九種の対句を挙げており、「的名對(切對)」はその第一に挙げられている。興膳宏氏は、「天と地、山と谷、東と西のように、同じカテゴリーに属しつつ、対照あるいは対立あるいは近似しあう概念によつて対偶を構成する」と説明する(『弘法大師空海全集』第五卷、筑摩書房、一九八六年)。ここでは、対句の中でも、最も基本的で単純なものという意味で取り上げられているのであろう。

* 歐陽少師：歐陽脩のこと。太子少師の官で致仕したので、そう称される。

る。

* 以文體爲對屬：散文のスタイルで対偶にすること。例えば、駢體体の賦に散文的要素を交えて作つた、歐陽脩の「醉翁亭記」などの作品を言うのであろう。第四十五節を参照のこと。

* 王特進：「特進」は、官名。朝廷の中で功績のある者に特別待遇として与えられた。『宋史』によれば、北宋初期に王姓で特進を賜つた者に、王旦と王安石がいる。『後山詩話』には、王安石はしばしば登場するが、その場合、「王荊公」や「王介甫」と称されるのが普通である。よつて、ここではおそらく王旦を称して「王特進」と言っているものと思われる。王旦は、真宗の時、参知政事や同中書門下平章事などの宰相職を歴任しており、時期的に歐陽脩とも近い。

* 表奏：「表」「奏」ともに、臣下が皇帝にたてまつる上奏文の一種。

【通釈】

北宋初期の知識人は、おおむね四六文を作ることができたが、散文的な言葉と故事とを用いたにすぎなかった。楊億の公文書は豪放雄厚な趣きがあり、文体も変化に富んだものであつたが、唐末と五代の氣風から抜け出せてはいなかつた。そのうえ好んで古い言葉を用い、切對には巧みであつたが、実はそれは、単に科挙の進士科の試験に課せられる賦のスタイルのようなものにすぎない。

歐陽脩に至つて、ようやく散文のスタイルで対偶を作り、さらに事柄を述べつらねることに長け、故事や古めかしい言葉を使わなくても、その文はますます高尚な趣きを備え、韓愈に次ぐものと言えよう。王特進の晩年の

表や奏といった公文書もまた巧みであるが、ただ技巧に凝りすぎるきらいがある。

五十二

元祐初、起范蜀公于家、固辭。其表云、「六十三而致仕。固不待年。七十九而造朝、豈云知禮」。是時文潞公八十餘、一召而來。人各有所志也。

【訓読】

元祐の初め、范蜀公を家より起こさんとするも、固辞す。其の表に云ふ、「六十三にして致仕す。固より年を待たず。七十九にして朝に造るは、豈に礼を知ると云はんや」と。是の時、文潞公は八十余、一たび召されて来たる。人各おの志す所有るなり。

【語釈】

- * 起家：官吏として起用すること。
- * 范蜀公：北宋・范鎮のこと。字は景仁。仁宗の宝元元年（一〇三八）の進士。知制誥・翰林学士などを歴任。神宗の熙寧三年、王安石の新法と合わず、戸部侍郎をもって退職した。哲宗の元祐年間の初め、再び出仕を求められたが、辞退した。蜀郡公に封ぜられた。
- * 致仕：退職すること。七十歳が退職すべき年齢とされていた。

- * 不待年：ここでは、退職年齢の七十歳を待たずに辞職したことを言う。
- * 文潞公：北宋・文彦博のこと。字は寛夫。仁宗の天聖五年（一〇二七）の進士。仁宗・英宗・神宗・哲宗の四朝に仕え、枢密副使・参知政事などを歴任。潞国公に封ぜられた。

【通釈】

元祐年間の初め、朝廷は范鎮を再度起用しようとしたが、范鎮はそれを固辞した。その表に次のように言う。「私は六十三歳で退職しました。七十歳という退職年齢でさえ待たなかつたのです。七十九歳で、再び朝廷に仕えるなど、どうして礼をわきまえた行為だといえましようか」と。この時、文彦博は八十数歳であったが、彼は朝廷から召されると、すぐさま赴いた。人にはそれぞれ志すものがあるのである。

五十三

昔之黠者、滑稽以玩世。曰彭祖八百歲而死、其婦哭之慟。其鄰里共解之曰、「人生八十不可得、而翁八百矣。尚何尤」。婦謝曰、「汝輩自不諭爾。八百死矣。九百猶在也」。世以癡爲九百。謂其精神不足也。

又曰、令新祝事而不習吏道。召胥魁問之。魁具道答

十至五十^{校^二}、及折杖數。令遽止之曰、「我解矣。答六十爲杖十四邪」。魁笑曰、「五十尚可、六十猶癡邪」。

長公取爲偶對曰、「九百不死、六十猶癡」。

【校異】

校一：「問之、魁」は、もと脱落していた。適園本によつて補う。

【訓読】

昔の黠^{かつ}なる者は、滑稽^{こつげい} 以て世を玩ぶ。曰く、彭祖^{ほうそ}は八百歳にして死し、其の婦 之を哭して慟す。其の隣里 共之を解きて曰く、「人生 八十 得べからざるに、而して翁は八百なり。尚ほ何をか尤めんや」と。婦 謝して曰く、「汝が輩、自ら論らざるのみ。八百は死せり。九百は猶ほ在るなり」と。世 痴を以て九百と爲す。其の精神の足らざるを謂ふなり。

又た曰く、令 新たに事を視るも吏道を習はず。胥魁^{しよかい}を召して之を問ふ。魁 具^{つぶ}さに答は十より五十に至ると道^いひ、折杖の數に及ばんとす。令 遽^{にわ}かに之を止めて曰く、「我 解せり。答の六十は杖の十四たるか」と。魁 笑ひて曰く、「五十は尚ほ可なり、六十は猶ほ痴たるか」と。

長公 取りて偶對^{つく}を爲りて曰く、「九百は死せず、六十

は猶ほ痴なり」と。

【語釈】

- * 黠者：賢い人。頭の回転がはやい人。
- * 滑稽：口先がうまいこと。
- * 彭祖：伝説上の仙人。長寿者の象徴的な存在とされる。
- * 九百：おろかな者の意。当時、愚か者のことを俗に「九百」と称した。
- * 視事：政務を執り行うこと。
- * 胥魁：地元で採用した小役人の頭^{かしら}。
- * 答：むちうち用の刑。その回数が十回から五十回までの五段階に分かれていた。

* 折杖：杖状のもので背中や臀部をたく刑。「折杖の制」と言い、宋の太祖の建隆四年（九六三）に、従来の杖刑を軽減するために設けられた。

* 六十猶癡邪：むち打ちの刑は、五十回までしかないのに、六十という数字を挙げたので、おかしいと言ったのであろう。

* 長公：蘇軾のこと。南宋・胡仔の『茗溪漁隱叢話』後集卷三十「東坡」に、以下のように言う。——當時以東坡爲長公、子由爲少公。（當時東坡を以て長公と爲し、子由を少公と爲す）。——「子由」は、蘇軾の弟・蘇轍の字。

* 「九百不死」の二句：現存の蘇軾の集には見えない。

【通釈】

昔の賢い者は、口先のうまさで世間をからかっていた。たとえば以下のように言う。彭祖が八百歳で死に、その妻が夫の死を大声で泣き悲しんだ。近隣の人たちはみな、彼女をなだめて言った。「人の寿命は八十でさええること

が難しいというのに、旦那さんは八百歳まで生きたじゃないですか。これ以上、何を咎めることがありませんか」と。妻は拒んで言った。「あなた方は理解されていないのです。八百歳の夫は死んでしまいました。なのに九百と呼ばれている者たちはまだ生きていますのです」と。世間では愚か者のことを九百と称している。神経が足りないことを意味するのである。

またの例に言う。県令が新たに政務を執り行うことになったものの、その方法を習得していなかった。そこで小役人の頭かしらを呼んで質問した。頭は鞭打ち刑が十回から五十回までの五段階に分かれていることを詳しく説明し、次に杖打ちの刑の回数を説明しようとした。すると県令は急にそれをやめさせて、次のように言った。「私にもう分かった。鞭打ち刑の六十回が杖打ち刑の十四回に相当するのだろう」と。頭は笑って言った。「五十であれば、まだよろしいのですが、六十というのは、やはりおかしいのではないでしょうか」と。

蘇軾はこの二つの話を取り上げて、以下のような対句を作った。「九百は死なない。六十はやはり愚かである」と。

五十四

唐語曰、「二十四考中書令」。謂汾陽王也。而無其對。或以問平甫、平甫應聲曰、「萬八千戸冠軍侯」。不惟對偶精切、其實亦相當也。

【訓読】

唐の語に曰く、「二十四考の中書令」と。汾陽王ふんやうを謂ふなり。而るに其の對する無し。或ひと以て平甫に問ふに、平甫 声に応じて曰く、「万八千戸の冠軍侯」と。惟だに對偶の精切なるのみならず、其の貴きも亦た相ひ当つるなり。

【語釈】

*二十四考：唐の郭子儀が長らく中書令の任にあり、人材登用の試験を行うこと二十四回にも及んだことを言う。

*汾陽王：郭子儀のこと。唐の肅宗の時、安史の乱を平らげて功を立て、汾陽王に封ぜられた。その後、太尉中書令となる。

*平甫：王安石の弟、王安国のこと。平甫はその字。

*冠軍侯：前漢の武將、霍去病のこと。『漢書』卷五十五「衛青霍去病伝」

によれば、匈奴を征伐した功績により、冠軍侯に封ぜられ、二千五百戸を賜った。その後、軍功を重ね戸数を加増されること四度、最終的には一万七千六百戸、およそ「萬八千戸」となった。

【通釈】

唐代の言葉に、「二十四回もの試験を行った中書令」とある。汾陽王の郭子儀のことを言ったものである。しかしこれと対になる句がなかった。ある人がそこで王安国に尋ねたところ、すぐさま応じて、「一万八千戸を賜った冠軍侯」と言った。対偶が精確だけでなく、詠われている人物の身分の貴さもまた釣り合いがとれている。

五十五

范文正公爲「岳陽樓記」、用對語說時景。世以爲奇。尹師魯讀之曰、「傳奇體爾」。『傳奇』、唐裴鏘所著小説也。

【訓読】

范文正公 「岳陽樓の記」を爲るに、對語を用ひて時景を説く。世 以て奇と爲す。尹師魯 之を讀みて曰く、「伝奇の体なるのみ」と。『伝奇』とは、唐の裴鏘の著す所の小説なり。

【語釈】

* 范文正公：北宋・范仲淹のこと。字は希文。文正はその諡。仁宗の慶

曆年間に參知政事として政治を革新した。それを「慶曆の新政」と称する。しかし、保守派の反対に遭い、地方に左遷された。

* 「岳陽樓記」：仁宗の慶曆六年（一〇四六）、范仲淹と同年の進士で、当時、岳州知事であった滕宗諒が岳陽樓を修築した。その記念に依頼されて范仲淹が書いたもの。その「先天下之憂而憂、後天下之樂而樂（天下の憂いに先んじて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ）」という一節は、「後樂園」の名称の由来としても有名。

* 時景：季節の景色。ちなみに「岳陽樓記」の中で、対句を用いて岳陽樓から眺められる季節の景色を描いた一節に、例えば以下のようなものがある。——至若春和景明、波瀾不驚。……沙鷗翔集、錦鱗游泳。

……而或長煙一空、皓月千里。浮光躍金、靜影沉璧。〔春は和やかに景は明らかなるが若きに至りては、波瀾 驚かず。……沙鷗は翔集し、錦鱗は游泳す。…… 而して或いは、長煙 一空にして、皓月千里なり。浮光は金を躍らせ、靜影は璧を沈む。〕——

* 尹師魯：北宋・尹洙のこと。師魯はその字。政治面では范仲淹を支持した。范仲淹が左遷されるにあたり、上奏文を提出して弁護したため、自らも降格処分となった。

* 『傳奇』：唐の裴鏘が著した小説集の名。『新唐書』巻五十九「藝文志三」には、「裴鏘傳奇三卷」と著録され、さらに裴鏘について「高駢従事〔高駢の従事なり〕」とある。すでに失われ現存しないが、『太平廣記』巻三十四所収の「崔韋」、巻五十所収の「裴航」、巻一九四所収の「崑崙奴」「聶隱娘」などの話は、『傳奇』を出典とすると言う。これらの話にはいずれも、「岳陽樓記」と同様、四字の対句が多く用いられている。尹洙が「岳陽樓記」を「伝奇のスタイルにすぎない」と言ったのも、あるいはこうした点を指していることかと思われる。

【通釈】

范仲淹が「岳陽樓の記」を作るにあたって、対になる

言葉を用いて岳陽楼から見える季節の景色を説いた。世間では優れた作品だと評価した。ところが、尹洙はそれを読んで「伝奇のスタイルにすぎない」と言った。ここで言う『伝奇』とは、唐の裴鉞が書いた小説のことである。

【備考】

尹洙の「傳奇體爾」という言葉を、范仲淹の「岳陽樓記」の文体を譏つたものとして解釈する従来の説に対して、高橋稔氏は、次のような異説を唱える。すなわち、尹洙の言葉は、「岳陽樓記」の対話が当時文人の間で作られた駢体文に見る対語ではなく、「傳奇」に代表される語り物の対語であることを明らかにしたものであり、尹洙が譏つたのは、范仲淹の著した文体に対してではなく、実はその対語の著し方を正しく判別する事もなくただ素晴らしいと言つて称えた「世」に対してであつたと（高橋稔論文「岳陽樓記」中の傳奇體について、『東方學』第百十二輯、東方学会、二〇〇六年）。ただし、論証の過程で資料の扱いにやや不正確と思われる箇所があり、にわかには支持することはできない（第六十三節、【語釈】*「論文正不當如此」を参照）。

五十六

柳三變遊東都南北二巷、作新樂府、軌轍從俗。天下詠之、遂傳禁中。仁宗頗好其詞、每對酒、〔校〕必使侍從歌之再三。三變聞之、作宮詞號「醉蓬萊」、因内官達後宮、

且求其助。仁宗聞而覺之、自是不復歌其詞矣。會改京官、乃以無行黜之。後改名永、仕至屯田員外郎。

【校異】

校一：「酒」は、もと脱落していた。前掲本によつて補う。

【訓読】

柳三變 東都の南北の二巷に遊び、新樂府を作り、軌轍いして俗に従ふ。天下 之を詠じ、遂に禁中に伝はる。仁宗 頗る其の詞を好み、酒に對する毎に、必ず侍從をして之を歌はしむること再三なり。三變 之を聞くや、宮詞を作りて「醉蓬萊」と号し、内官に因りて後宮に達せしめ、且に其の助を求めんとす。仁宗 聞きて之を覺り、是れより復た其の詞を歌はず。会たま京官を改むるに、乃ち無行を以て之を黜しりぞく。後、名を永と改め、仕へて屯田員外郎に至る。

【語釈】

*柳三變：柳永のこと。もとの名を「三變」と言う。若い頃は官職に恵まれず、北宋・仁宗の景祐元年（一〇三四）に五十歳を超えてようやく科擧の進士科に合格し、屯田員外郎となつた。また、慢詞と呼ばれる、長短句を交えた長篇の詞を数多く作つた最初の詞人として名高い。

*東都南北二巷：「東都」は、北宋の都、開封のこと。『東京夢華録』巻

二「潘樓東街巷」によれば、潘樓街の東に「南斜街」と「北斜街」という名の盛り場があり、ともに妓楼があつたと言う。「南北二巷」とは、これらを指すか。また、『東京夢華録』巻二「宣德樓前省府宮宇」によれば、朱雀門の南に「院街」と呼ばれた妓楼ばかりの通りがあつたという。あるいは、「南北二巷」とは、朱雀門の南にあつた「院街」と潘樓街の東にあつた盛り場とを指すか。

*新樂府：ここでは、詞のこと。

*執轍：屈曲する、の意。ここでは、官職に恵まれず、やむなく世俗に従つて生きているさまを言う。

*内官：宮中の女官。

*無行：節操がないこと。

【通釈】

柳三変は、東都の南北二つの色街に足を運んでは、詞を作り、意に反して世俗に従い暮らしていた。天下の人々が彼の詞を口ずさんだので、かくして宮中にまで伝わることになった。仁宗はたいそう彼の詞を好み、酒宴を催すごとに、必ず侍従に何度も彼の詞を歌わせた。三変はそのことを耳すると、宮廷を詠じた詞を作り「醉蓬萊」と名づけ、宮中の女官に頼んで、後宮に届けさせ、援助を求めようとした。仁宗はそのことを耳にし、三変が自分を売り込もうとしていることを覚り、以来、彼の詞を歌うことをやめてしまった。都の官吏を改めるに際して、節操がないとの理由で、なんと仁宗は彼を退けた

のである。三変は後に名前を永と改め、官に仕えて屯田員外郎に至つた。

五十七

寧拙母巧。寧樸母華。寧粗母弱。寧僻母俗。詩文皆

然。

【訓読】

寧ろ拙なるも巧なること母^なかれ。寧ろ樸なるも華なること母かれ。寧ろ粗なるも弱なること母かれ。寧ろ僻なるも俗なること母かれ。詩文 皆な然り。

【通釈】

技巧に走るよりは、むしろ拙劣な方がよい。華美を求めるとは、むしろ質朴な方がよい。弱々しいよりは、むしろ粗削りな方がよい。通俗的であるよりは、むしろ偏屈な方がよい。これらは、詩と文とのいずれにもあてはまるであろう。

五十八

魏文帝曰、「文以意爲主、以氣爲輔、以詞爲衛」。子桓不足以及此、其能有所傳乎。

【訓読】

魏の文帝曰く、「文は意を以て主と爲し、氣を以て輔と爲し、詞を以て衛りと爲す」と。子桓 以て此れに及ぶに足らざるに、其れ能く伝はる所有らんや。

【語釈】

*魏文帝：三国時代・魏の初代皇帝である曹丕（字は子桓）のこと。

*文以意爲主：南宋・魏慶之の『詩人玉屑』巻六にも、魏の文帝の言葉として掲載しているが、魏の文帝の集には、これらの言葉は見えない。ただし、その『典論』論文には以下のような記述がある。

——文以氣爲主。氣之清濁有體、不可力強而致。「文は氣を以て主と爲す。氣の清濁に体有り、力めて強ひて致すべからず」。——ちなみに、唐・杜牧の「答莊充書」には、以下のような類例の記述がある。

——凡爲文以意爲主、以氣爲輔、以辭彩章句爲之兵衛。「凡そ文を爲るに意を以て主と爲し、氣を以て輔と爲し、辭彩章句を以て之が兵衛と爲す」。——

*子桓：魏の文帝、曹丕のこと。子桓はその字。

【通釈】

魏の文帝（曹丕）の言葉に、「文は表そうとする意を主とし、みなぎる精氣を助けとし、言葉を護りとする」

とある。曹丕はこの言葉の域に十分に達しているとは言えないのに、どうして後世に伝わる文などあるであろうか。

五十九

魯直與方蒙書、「頃洪甥送令嗣二詩。風致灑落、才思高秀。展讀賞愛、恨未識面也。然近世少年、多不肯治經術及精讀史書、乃縱酒以助詩。故詩人致遠則泥。想達源自能追琢之、必皆離此諸病、漫及之爾」。

與洪朋書云、「龜父所寄詩、語益老健、甚慰相期之意。方君詩、如鳳雛出鷩。雖未能翔于千仞、竟是真鳳凰爾」。與潘邠老書曰、「大受今安在。其詩甚有理致、語又工也」。又曰、「但詠五言、覺翰墨之氣如虹、猶足貫日爾」。

【校異】

校一：「書」「酒」「詩人」は、もと脱落していた。適園本によって補う。
校二：「風」は、もと脱落していた。適園本によって補う。
校三：「與潘邠老書曰……」は、もとは（第六十三節の）「余評李白詩」の後にあった。適園本によって補い移す。

【訓読】

魯直の方蒙に与ふるの書にいふ、「頃ろ洪甥 令嗣の二詩を送る。風致は灑落にして、才思は高秀なり。展読して賞愛するも、未だ面を識らざるを恨むなり。然れども近世の少年、多く経術を治むること及び史書を精読するを肯せず、乃ち酒を縦にして以て詩を助く。故に詩人遠きを致さんとすれば、則ち泥む。想ふに、達源 自ら能く之を追琢すれば、必ず皆な此の諸病を離れ、漫として之に及ぶのみ」と。

洪朋に与ふるの書に云ふ、「亀父の寄する所の詩、語は益ます老健にして、甚だ相期の意を慰む。方君の詩は、鳳雛の殻より出づるが如し。未だ千仞を翔けること能はずと雖も、竟に是れ真の鳳凰なるのみ」と。

潘邠老に与ふるの書に曰く、「大受は今 安くにか在る。其の詩 甚だ理致有り、語も又た工なり」と。又た曰く、「但だ五言を詠ずるのみなるも、翰墨の気 虹の如く、猶ほ日を貫くに足るがごときを覚ゆ」と。

【語釈】

*魯直：北宋・黄庭堅のこと。魯直はその字。

*方蒙：未詳。『揮塵録』後録卷七に、「方達源……、達源名蒙（方達源……、達源、名は蒙）」とある。

*洪甥：ここでは、黄庭堅の甥にあたる洪朋（字は亀父）を指す。

*令嗣：令息。

*致遠則泥：高遠なことをしようとすれば、滞ってしまいに進まなくなる。『論語』子張篇に、以下のようにある。——雖小道、必有可觀者焉。致遠恐泥。是以君子不爲也。（小道と雖も、必ず觀るべき者有り。遠きを致さんには泥まんことを恐る。是を以て君子は為さざるなり）。——

*達源：方蒙のこと。達源はその字。

*方君詩：方蒙の息子の詩を指す。

*潘邠老：北宋・潘大臨のこと。邠老はその字。黄州の人で、家が貧しく出仕することはなかった。蘇軾が黄州に左遷されていた時に交流があつた。

*大受：晁端稟のこと。大受はその字。晁補之の『鷄肋集』卷六十三参照。

*虹貫日：虹が太陽を貫くこと。精誠の情が天に通じて起こる現象とされた。『史記』卷八十三「刺客列伝」に以下のように言う。——昔者、荆軻慕燕丹義、白虹貫日。太子畏之。（昔、荆軻 燕丹の義を慕ひ、

白虹 日を貫く。太子 之を畏とす）。——

【通釈】

黄庭堅が方蒙に与えた書簡に、次のように言う。「このごろ甥の洪朋があなたのご子息の詩を二首届けてくれました。趣きはさっぱりとしていて、才能も高く抜きん出ております。閲覧してはその出来映えに感心しておりますが、ご子息にまだお会いしたことがないのが残念です。しかしながら、近頃の若者は、儒教の經典の学習や、歴史書の精読をしたがらない者が多く、それどころか酒を

存分に飲んで詩作の助けとしている次第です。だから(近頃の)詩人たちは、高遠な詩を作ろうとすれば、すぐに滞ってしまい前に進めなくなるのです。私が思いますに、あなた自身がしつかりと学問に磨きをかけられているので、あなたの詩文はいずれもきつとこれらの弊害から免れたのであり、その影響があなたのご子息にも及んだにちがいません」と。

洪朋に与えた書簡に、次のように言う。「あなたが届けてくれた詩は、言葉がますます力強く風格を備え、あなたに会いたいと思う私の気持ちを十分に慰めてくれます。(二緒に届けてくれた)方蒙さんのご子息の詩は、あたかも鳳の雛が殻から出てきたかのように、千仞の高さまで飛ぶことはまだできないものの、本物の鳳にちがいません」と。

潘大臨に与えた書簡に、「晁端稟はいまどこにいるのでしょうか。その詩はたいそう趣きがあり、言葉もそのうえ巧みです」と言い、さらに「ただ五言の詩しか作っていませんが、筆致にみなぎる精気は、虹が太陽を貫くかのように感じます」と言う。

六十

老杜云、「長鑱長鑱白木柄、我生託子以爲命。黃獨無苗山雪盛、短衣數挽不掩脛」。往時儒者不解黃獨義、改爲黃精、學者承之。以余考之、蓋黃獨是也。『本草』緒魁注、「黃獨、肉白皮黃、巴漢人蒸食之。江東謂之土芋」。余求之江西、謂之土卵。煮食之類芋魁云。

【訓読】

老杜云ふ、「長き鑱すき 長き鑱すき 白木の柄よ、我が生は子に託して以て命と為す。黄獨こうどくに苗無く 山雪 盛んなり、短衣 数しば挽くも 脛すねを掩はず」と。往時の儒者、黄獨の義を解せず、改めて黄精と為し、学ぶ者 之を承く。以て余 之を考ふるに、蓋し黄獨 是ぜならん。『本草』の緒魁しゆかいの注にいふ、「黄獨、肉は白く皮は黄にして、巴漢の人 蒸して之を食らふ。江東 之を土芋と謂ふ」と。余之を江西に求むるに、之を土卵と謂ふ。煮て之を食らふに芋魁うかいに類すと云ふ。

【語釈】

*「長鑱」の四句：七言古詩「乾元中寓居同谷縣作歌七首」其二の一節。「長鑱」は、長い柄をもつ土を掘るための農具。すき。

*黄獨：植物の名。黄色のたねいものような根が一つだけあることから、その名がある。形は、芋や卵に似る。

*黄精：薬草の名。

*『本草』「赭魁」：『本草』は、書名。薬の原料となる植物について説明したものの、『本草』と称する書籍は複数あるが、ここでの『本草』がどれなのかは不明。「赭魁」は、薬草の名。

*巴漢：今の四川省の東、湖北省の西、陝西省の南一帯の地域を指す。

*江東：長江下流域の南岸一帯の地を指す。

*江西：長江下流域の北岸一帯の地を指す。

*芋魁：たねいも、おやいも。

【通釈】

杜甫の詩に、次のように言う。「長いすぎ、長いすぎ、その白木の柄よ。私はおまえに生活を託して命の綱としているのだ。黄獨は苗もなく、山には雪が盛んに降り積もる。冬だというのに夏用の短い衣を着て、裳裾を何度も引つぱるものの、すねを覆いかくすことは出来ない」と。むかしの儒者は、「黄獨」の意味を理解せず、「黄精」の字に改め、以来、杜甫の詩を学ぶ者たちはそれを継承している。そこで私が考えるに、おそらく「黄獨」が正しいであろう。『本草』の「赭魁」の注に、次のように言う。「黄獨、中の身は白く皮は黄色で、巴漢の人たちは蒸して食べる。江東では土芋と呼んでいる」と。私があるを江西で探し求めたところ、そこでは土卵と呼んでいた。

煮て食べたところ、種芋に似ていた。

六十一

余讀『周官』月令、云「反舌有聲、佞人在側」。乃解老杜「百舌」、「過時如發口、君側有讒人」之句。

【訓読】

余『周官』の月令を読むに、「反舌^{はんせつ} 声有れば、佞人^{ねいじん}側に在り」と云ふ。乃ち老杜の「百舌」の、「時を過ぎてもし口を発^{ひら}かば、君の側に讒人^{ざんじん}有り」の句を解す。

【語釈】

*『周官』月令：『周官』は、一般に『周禮』のことを指すが、ここでは、『汲冢周書』を指す。「月令」は、その卷六「月令第五十三」のこと。西晋の武帝の時に、汲郡の不準という人が、戦国時代の魏の襄王（一説に、安釐王）の墓を掘って発見したもので、先秦の古書とされる。ちなみに、その時に発見された他の古書に『竹書紀年』『穆天子伝』などがある。

*「反舌」の二句：前掲の『汲冢周書』卷六「月令第五十三」に見える。

なお、『周禮』および『禮記』月令篇には、この二句は見えない。ただし、『禮記』月令篇には、「反舌無聲（反舌に声無し）」という言葉は見える。「反舌」は、鳥の名。モズ。

*百舌：鳥の名。モズ。

*「過時」の二句：杜甫の五言律詩「百舌」詩の尾聯。

【通釈】

『汲冢周書』の月令篇を読んでいると、「モズの声がすると、よこしまな人が側にいる」とあった。私はそこではじめて杜甫の「百舌」詩の、「時期を過ぎて、もしモズが鳴いたならば、君主の側にはよこしまな人がいる」という句が理解できた。

六十二

韋蘇州詩云、「憐君臥病思新橘、試摘才酸亦未黃。書後欲題三百顆、洞庭須待滿林霜」。余往以爲蓋用右軍帖中「贈子黃柑三百」者。比見右軍一帖、云「奉橘三百枚。霜未降、未可多得」。蘇州蓋取諸此。

【訓読】

韋蘇州の詩に云ふ、「君の病に臥して新橘を思ふを憐れみ、試みに摘めば才かに酸にして亦た未だ黄ならず。書後に題せんと欲す 三百顆、洞庭にて須らく待つべし 満林の霜を」と。余 往に以為へらく、蓋し右軍の帖中の「子に黄柑三百を贈る」なる者を用ふるならん、と。比右軍の一帖を見るに、「橘三百枚を奉る。霜 未だ

降らざれば、未だ多くは得べからず」と云ふ。蘇州 蓋し諸を此こより取るならん。

【語釈】

*韋蘇州：唐の韋応物のこと。王維・孟浩然・柳宗元とともに、唐代を代表する自然派詩人で、「王・孟・韋・柳」と併称される。また、蘇州刺史の任についたことから、韋蘇州と呼ばれる。

*「憐君」の詩：詩題は「答鄭騎曹青橘絕句」。一説に、「故人重九日求橘書中戲贈」。『全唐詩』卷一九〇では、「才」を「猶」に作る。「やつ」という意の「才」よりも、「まだ」という意の「猶」の方が文脈の上で適しているよう。

*「書後」の句：手紙を書いたあとの余白に三百個のみかんの絵を描こうと思う、の意。

*右軍：東晋・王羲之のこと。右軍將軍となったことから、王右軍と呼ばれる。書家としても優れ、また永和九年（三五四）に会稽山の北の蘭亭で曲水の宴を催したことも知られる。

*「贈子黄柑三百」の帖：題は未詳。「黄柑帖」と題する一帖に、「奉黄柑二百（黄柑二百を奉る）」とあるが、あるいはこれを指すか。

*「奉橘三百枚」の帖：題は「奉橘帖」。

【通釈】

韋応物の詩に次のように言う。「君が病に臥せ熟したばかりのみかんが食べたいと思つて、不憫に思ひ、試みに摘んでみたところ、酸っぱくて色もまだ黄色く熟していない。そこで手紙の余白に三百個のみかんの絵を描いて差し上げようと思う。洞庭湖のほとりで、霜

が林いつぱいに降りるのを待ちたまえ」と。私は以前は
てつきり王羲之の帖中の「君に三百個の黄色いみかんを
贈る」という記述を用いているものと思っていた。しか
し、最近になって王羲之の別の一帖を見ていたところ、
「みかん三百個を献上します。霜がまだ降りていないの
で、たくさんは収穫できませんでした」とあった。韋応
物はきつとこれを典故として用いていたのであろう。

六十三

余評李白詩、如張樂于洞庭之野。無首無尾、不主故
常。非墨工槧人所可擬議。吾友黃介讀「李杜優劣論」曰、
「論文正不當如此」。余以爲知言。

【訓読】

余 李白の詩を評するに、楽を洞庭の野に張るが如し。
首も無く尾も無く、故常を主とせず。墨工・槧人の擬議
すべき所に非ず、と。吾が友の黄介、「李杜優劣論」を読
みて曰く、「文を論ずるは、正に当に此くの如くなるべか
らず」と。余 以て知言と為す。

【語釈】

*張樂：『莊子』天運篇の以下の記述を踏まえる。——北門成問於黃
帝曰、「帝張咸池之樂於洞庭之野。……」。帝曰、「吾奏之以人、徵之
以天。……其卒無尾、其始無首。……」。〔北門成〕黃帝に問ひて曰く、「帝
咸池の樂を洞庭の野に張る。……」。と。帝曰く、「吾れ之を奏する
に人を以てし、之を徵するに天を以てす。……其の卒るや尾無く、其
の始まるや首無し。……」。と。——「無首無尾」は、黃帝が披露した
音楽が、どこから始まり、どこで終わったかも分からないほど変化
に富むことを言う。

*不主故常：旧い規範に縛られないこと。『莊子』天運篇に、以下のよう
にある。——其聲能短能長、能柔能剛、變化齊一、不主故常。〔其の
声は能く短く能く長く、能く柔らかく能く剛く、変化するも齊一に
して、故常を主とせず。〕——

*墨工槧人：決められた作業工程で仕事をする刻工や印刷業者。

*擬議：推し量ること。『易』繫辭上に、以下のようにある。——言天下
之至隨而不可惡也。言天下之至動而不可亂也。擬之而後言、議之而
後動。擬議以成其變化。〔天下の至隨を言ふも惡むべからざるなり。
天下の至動を言ふも乱すべからざるなり。之を擬へて後に言ひ、之
を議りて後に動く。擬議して以て其の變化を成す。〕——「至隨」は、
このうえなく入り組んで複雑なこと。「至動」は、変化きわまりない
動き。「擬之」「議之」の「之」は、それぞれ易の象と爻を指して言う。
*黄介：伝未詳。『全宋詩』卷二二四に詩一首のみを載せる黄介（字は
景達）と同一人物か。
*「李杜優劣論」：五代・後晋の劉昫等が撰した『舊唐書』卷一九〇下「杜
甫伝」に、「元和中、詞人元稹論李杜之優劣曰〔元和中、詞人の元稹
李杜の優劣を論じて曰く〕として引用されている、杜甫の方が優れ
るとする元稹の論評を指すであろう。元稹は、以下のように言う。

——予觀其壯浪縱恣、擺去拘束、模寫物象、及樂府歌詩、誠亦差肩於子美矣。至若鋪陳終始、排比聲韻、大或千言、次猶數百、詞氣豪邁、而風調清深、屬對律切、而脫棄凡近、則李尚不能歷其藩翰、況堂與乎。〔予〕觀るに、其（李白）の壯浪縱恣にして、拘束を擺去し、物象を模写すること、及び樂府歌詩は、誠に亦た子美に差肩せり。終始を鋪陳し、声韻を排比し、大なるものは或いは千言、次ぐもの猶ほ數百、詞氣は豪邁にして、而して風調は清深、属対は律切にして、而して凡近を脱棄するが若きに至りては、則ち李は尚ほ其の藩翰を歴る能はず、況や堂の奥をや。——なお、以上に挙げた元稹の言葉は、もとは彼の「唐檢校工部員外郎杜君墓係銘」に見え、『舊唐書』はそこから引用している。また、「李杜優劣論」については、高島俊男著『李白と杜甫』（講談社学術文庫、二四三頁）を参照。そこに以下のように言う。——「論者の結論は、大まかに言つて二つに分かれる。一つは、杜甫のほうが上だとするものであり、今一つは、いづれが上とも定めがたい、あるいは、優劣を論ずることは無意味である、とするものである。自分は李白のほうが好きだ、という者はあるが、李白のほうが詩人として上である、と言つた者はあまり見当らぬようである。」——

*「論文正不當如此」：李白を杜甫よりも劣るとする元稹の「李杜優劣論」を批判した言葉。なお、第五十五節【備考】所掲の高橋論文では、自説を補強する資料の一つとして本節を挙げ、第五十五節と関連づけた解釈を試みている。そして、黄介のこの言葉については、「范文正を論ずる場合はこうは言えませぬな」と解釈する。高橋氏は、本節の話を無批判に陳師道の言葉とし、「文正」を范仲淹の諡と捉えて解釈しているようである。しかし、本節の【備考】にも示す通り、本節の話は、黄庭堅の『山谷集』巻二十六にも「題李白詩草後」と題して、一字も違うことなく収められており、本来、黄庭堅の言葉

であるものが『後山詩話』に紛れ込んだ可能性が高いと考えられるのである。もしそうだとすれば、本節の話は、黄庭堅の手による単独の完結した話ということになり、つまりは第五十五節とは全く関連のない話ということになり、高橋氏の解釈は成り立たないことになろう。かりに、本節が陳師道の言葉であったとしても、黄庭堅の集にも見えることについては、指摘しておくべきであろう。にわか

【通釈】

私が李白の詩を評価するに、それはあたかも黄帝が洞庭湖のほとりの野原で演奏させた「咸池の楽」のようだ。

どこで始まりどこで終わったかが分からないほど変化に富み、古い規範にこだわらない。決められた作業工程で仕事をするだけの刻工や印刷に携わる職人たちが推し量ることの出来るようなものでは決してない、と。私の友人の黄介が「李杜優劣論」を読んで、次のように言った。「文を論じるのに、こんなふうに論じてはだめだ」と。私

【備考】

六十から六十三の四節については、もともと黄庭堅の文章であったのが、誤って『後山詩話』に編入されたものらしい。この点については、南宋・胡仔の『苕溪漁隱叢話』前集卷六「杜少陵」には以下のように言う。——此四事、皆見魯直『豫章集』中。今『後山詩話』亦有之、不差一字。疑後人誤編入也。（此の四事、皆な魯直の『豫章集』の中に

見ゆ。今、『後山詩話』も亦た之れ有り、一字を差はず。疑ふらくは、後人 誤りて編入するならん、と。——ちなみに、六十から六十二の三節は、黄庭堅の『山谷集』外集巻九に「雜書」と題して収められており、六十三は、『山谷集』巻二十六に「題李白詩草後」と題して収められている。

【訓読】

礼部員外郎の裴説の「辺衣を寄する詩」に曰く、

深閨 乍ち冷ややかにして 香篋を開き
玉筋 微微として 紅頬を湿す

一陣の霜風 柳條を殺し

濃煙 半夜 黄葉と成る

重重たる白練 明らかなること雪の如し

独り閑階に下り 転た凄切たり

祇だ知る 杵を抱きて 秋砧を搗つを

覚えず 高樓 已に月無きを

時に聞く 塞雁 声 相ひ喚ぶを

紗窓 只だ 灯の相ひ伴ふ有るのみ

幾たびか齊紈を展くも 又た裁つに懶し

離腸 金刀に逐はれて断たるるを恐る

細やかに儀形を想ひて 牙尺を執り

刀を回らし剪破す 澄江の色を

愁ひて金針を捻り 手に信せて縫ふも

惆悵す 人の寛窄を試むる無きを

時時 手を挙げて 残涙を勻ふ

紅牋 漫りに千行の字有り

書中 尽くさず 心中の事

六十四

禮部員外郎裴説「寄邊衣詩」曰、

深閨乍冷開香篋 玉筋微微濕紅頰

一陣霜風殺柳條 濃煙半夜成黃葉

重重白練明如雪 獨下閑階轉淒切

祇知抱杵搗秋砧 不覺高樓已無月

時間塞雁聲相喚 紗窗只有燈相伴

幾展齊紈又懶裁 離腸恐逐金刀斷

細想儀形執牙尺 回刀剪破澄江色

愁捻金針信手縫 惆悵無人試寬窄

時時舉手勻殘淚 紅牋漫有千行字

書中不盡心中事 一半殷勤託邊使

裴説詩句甚麗。『零陵總記』載説詩一篇、尤詼詭也。

一半 殷勤として 辺使に託す

と。裴説はいせうの詩句 甚だ麗し。『零陵総記』に説えうの詩一篇を載するは、尤も詭詭かいきなり。

【語釈】

* 邊衣：辺境にいる夫に着せるための衣服。

* 香篋：化粧箱。

* 玉筋：玉でできた箸。ここでは、美人の両目から流れる二筋の涙をたとえる。

* 重重：重なり合うさま。

* 搗秋砧：秋になり冬服を作るための準備として、絹の艶を出すために、絹を石の板に載せて木槌で叩くこと。「砧」は、絹を載せる石の板きぬいた。

* 紗窗：薄絹を張った窓。

* 齊紈：齊(今の山東省)の地方で産出される白い薄絹。齊の絹は、質が良いことから、広く貴重な絹を指すようになった。「紈」は、白い薄絹。

* 儀形：姿形。ここでは、夫の体型を指す。

* 澄江：練り絹を言う。南朝齊・謝朓の「晚登三山還望京邑」詩の以下の句を踏まえる。——餘霞散成綺、澄江靜如練。「余霞 散じて綺と成り、澄江 静かなること練の如し。——

* 詭詭：ふざけたさま。

【通釈】

礼部員外郎の裴説の「辺衣を寄する詩」に言う。

奥深い寝室で急に冷え込んできたなか、妻は化粧箱を開ける。玉の箸のように二筋の涙がかすかに流

れ紅をさした頬を潤す。霜を含んだ冷たい風がひとしきり吹きつけて柳の枝を痛めつける。濃いもやがたちこめ夜半には木々の葉は黄色に変わった。

幾重にも重なる白い練り絹は雪のように明るく輝く。人気がない階段をひとり下りるとますます寂しさがつのるばかり。杵を抱いて秋の夜にひたすら砧をうつ。気づかぬうちに高殿を照らしていた月はずでに姿を消してしまった。

時おり辺境から来た雁の呼び合う声が聞こえてくる。薄絹を張った窓辺で灯火だけが相手をしてきている。何度も白絹を払ってみるものの、裁断する気にはなれない。離別の悲しみで断ち切れんばかりの腸が、金の刀によつて断たれてしまうのではないかと恐れるからだ。

細かく夫の体型を思いめぐらしては象牙のものさしを手に取り、刀をめぐらしては澄んだ川の静かな流れのような練り絹を切り裂く。愁いつつ金の針を捻り手にまかせて縫うものの、大きさを試してくれる人がいないことが辛く悲しい。

しばしば手を挙げては涙の痕をぬぐう。紅の線が

引かれた便箋にはとりとめもなく千行にもわたる字を書き付けた。手紙の中では心の中の伝えたい事柄を述べ尽くすことができない。せめて思いの一端を丁重に辺境に赴く使者に託すのだ。

と。裴説の詩句はたいへん華麗である。『零陵総記』には裴説の詩を一篇載せているが、その詩はとりわけふざけたものである。

六十五

世語云、「蘇明允不能詩、歐陽永叔不能賦。曾子固短於韻語、黃魯直短於散語。蘇子瞻詞如詩、秦少游詩如詞」。

【校異】

校一：「曾子固」以下の三句は、もと「曾子開」の三字に作る。適園本によって補う。

【訓読】

世語に云ふ、「蘇明允は詩を能くせず、歐陽永叔は賦を能くせず。曾子固は韻語に短にして、黄魯直は散語に短なり。蘇子瞻の詞は詩の如く、秦少游の詩は詞の如し」と。

【語釈】

*蘇明允不能詩：「蘇明允」は、北宋・蘇洵のこと。明允はその字。「蘇洵は詩を作れない」とする陳師道の評価に対して、南宋・胡仔は『苕溪漁隱叢話』前集卷三十八「東坡」の中で、以下のように反論する。
——後山談何容易。便謂「老蘇不能詩」、何誣之甚。〔後山の談は何ぞ容易なる。便ち「老蘇は詩を能くせず」と謂ふは、何ぞ誣ふること之れ甚だしきや。〕——

*歐陽永叔：北宋・歐陽脩のこと。永叔はその字。

*曾子固：北宋・曾鞏のこと。子固はその字。

*黄魯直：北宋・黄庭堅のこと。魯直はその字。

*蘇子瞻：北宋・蘇軾のこと。子瞻はその字。

*秦少游：北宋・秦觀のこと。少游はその字。

【通釈】

世間の言葉に、次のように言う。「蘇洵は詩を作れず、歐陽脩は賦を作れない。曾鞏は韻文が苦手で、黄庭堅は散文が苦手である。蘇軾の詞は詩のようで、秦觀の詩は詞のようだ」と。

六十六

韓詩如「秋懷」「別元協律」「南溪始泛」、皆佳作也。

【訓読】

韓の詩の「秋懷」「元協律に別る」「南溪に始めて泛ぶ」

の如きは、皆な佳作なり。

【語釈】

*韓詩：唐の韓愈の詩。

*「秋懷」：「秋懷詩」と題する十一首連作の五言古詩。元和元年(八〇六)

の時か、あるいは元和七年(八一二)の時かについては、説が分かれるが、韓愈が国子博士に就任した時の作とされ、秋の悲しい気配を詠った戦国時代・楚の宋玉の「九辯」の流れを組むものとして、高く評価されている。

*「別元協律」：「贈別元十八協律」と題する六首連作の五言古詩。元和十四年(八一九)、「論佛骨表」をたてまつって憲宗の怒りに触れ、刑部侍郎から潮州刺史に左遷となり、潮州に赴く道中での作とされる。

*「南溪始泛」：三首連作の五言古詩。長慶四年(八二四)、病気のため休暇を願い、長安の南の郊外にある別荘で静養していた折りの作とされ、一説には、韓愈の最後の作品とも言われる。

【通釈】

韓愈の詩でたとえば「秋懷」「元協律に別る」「南溪に始めて泛ぶ」などは、いずれも出来映えのよい作である。

六十七

鮑照之詩、華而不弱。陶淵明之詩、切於事情、但不文耳。

【訓読】

鮑照の詩は、華にして弱ならず。陶淵明の詩は、事情に切なるも、但だ文らざるのみ。

【語釈】

*鮑照：南朝宋の詩人。楽府体の詩に優れ、謝靈運・顔延之と並んで「元嘉の三大家」と称される。

*陶淵明：東晋の詩人。役人生活に馴染めず、郷里の農村に帰り、悠々自適の生活を送った。田園での生活に密着した詩を多く作り、田園詩人とも称される。

*切於事情：「切」は、密着していること。「事情」は、事理や世情のこと。ここでは、陶淵明の詩が現実の社会や生活に密着していることを言う。魏末・嵇康の「與山巨源絶交書」に、以下のようにある。——
足下舊知、吾潦倒羸疎、不切事情。(足下 旧より知れり、吾れの潦倒羸疎にして、事情に切ならざるを)。——
*文：美しく飾ること。

【通釈】

鮑照の詩は、華やかだが弱々しくない。陶淵明の詩は、現実の社会や生活に密着しているが、ただ美しさに欠けている。

六十八

子厚謂屈氏『楚詞』、知「離騷」乃效「頌」、其次效「雅」、最後效「風」。

【訓読】

子厚 謂へらく、屈氏の『楚詞』、「離騷」は乃ち「頌」に效ひ、其の次に「雅」に效ひ、最後に「風」に效ふを知る、と。

【語釈】

*子厚：唐の柳宗元のこと。子厚はその字。順宗の時、王叔文らの政治改革に加わるが、王叔文の失脚によって、永州（湖南省）に左遷された。永州は、戦国時代の楚の国の領域で、懷才不遇の詩人の祖とされる屈原とも縁の深い地であった。「閔生賦」や「弔屈原文」など、いわゆる屈原賦に倣った作品を多く残している。ちなみに、これらの作品は、南宋・朱熹の『楚辭集注』「楚辭後語」巻五に収録されている。

*屈氏『楚詞』：「屈氏」は、戦国時代・楚の屈原のこと。楚の公族の人で、内政外交ともに尽力していたが、讒言に遭い追放され、最後は失意のうちに汨羅に身を沈めて亡くなったとされる。『楚詞』は、『楚辭』に同じ。「離騷」をはじめ屈原の辞賦作品や、その弟子の宋玉などの辞賦作品を集めたアンソロジー。

*「頌」「雅」「風」：『詩經』の詩は、内容によって「風」「雅」「頌」の三種類に区分される。「風」は各地の民謡。「雅」は周王朝の宮廷歌謡。「頌」は、宗廟で歌われた祭祀歌謡。

【通釈】

柳宗元が屈原の『楚辭』を評して言うには、「離騷」は実に、まず『詩經』の「頌」を手本とし、その次に「雅」を手本とし、最後に「風」を手本としたものであること

が分かった、と。

六十九

右丞蘇州、皆學於陶王、得其自在。

【訓読】

右丞・蘇州は、皆な陶・王に学び、其の自在を得たり。

【語釈】

*右丞：唐の王維のこと。尚書右丞となったことから、そう称される。
 孟浩然・韋応物・柳宗元とともに唐代の山水自然派詩人を代表する。
 *蘇州：唐の韋応物のこと。蘇州刺史となったことから、そう称される。
 *陶：東晋の陶淵明のこと。
 *王：南朝梁の王籍のこと。一般には、「陶謝（陶淵明・謝靈運）」と併称されるが、ここで王籍が挙げられているのは、おそらく若耶溪の美しい自然を詠った「入若耶溪」詩の「蟬噪林逾靜、鳥鳴山更幽（蟬噪ぎて 林 逾いよ静かに、鳥 鳴きて 山 更に幽なり）」の対句が、後世に高く評価されているからであろう。
 *自在：物事にとられない安らかな境地。

【通釈】

王維と韋応物は、いずれも陶淵明や王籍に学び、彼らの物事にとられない安らかな境地を得た。

七十

眉山長公守徐、嘗與客登項氏戲馬臺、賦詩云、「路失玉鈎芳草合、林亡白鶴野泉清」。廣陵亦有戲馬臺、其下有路號「玉鈎斜」。唐高宗東封、有鶴校二下焉。乃詔諸州爲老氏築宮、名以白鶴。公蓋誤用。而後所取信。故不得不辯也。

【校異】

校一：「下」は、もと「一」に作る。適園本によつて改める。

【訓読】

眉山の長公 徐に守たりしとき、嘗て客と項氏の戲馬台に登り、詩を賦して云ふ、「路に玉鈎を失ひ 芳草合す、林に白鶴を亡ひ 野泉 清らかなり」と。広陵にも亦た戲馬台有り、其の下に路有りて「玉鈎斜」と号す。唐の高宗 東封せしとき、鶴有りて焉三に下る。乃ち諸州に詔して老氏のたぬ爲に宮を築かしめ、名づくるに白鶴を以てす。公 蓋し誤りて用ふるならん。而して後に取信する所なり。故に辯ぜざるを得ざるなり。

【語釈】

*眉山長公：蘇軾のこと。眉山は、四川省眉山市。蘇軾の出身地。南宋・

胡仔の『苕溪漁隱叢話』後集卷三十「東坡」に以下のように言う。
——當時以東坡爲長公、子由爲少公。(當時 東坡を以て長公と爲し、子由を少公と爲す)。——「子由」は、蘇軾の弟、蘇澈の字。

*守徐：徐州(江蘇省)の知事の任にあること。蘇軾は、熙寧十年(一〇七七)四月から元豐二年(一〇七九)三月まで、その任にあつた。

*項氏戲馬臺：項羽が建てた台の名。江蘇省銅山県の南にあつた。なお、揚州の廣陵郡(江蘇省江都県)にも、同じ名の台があつたとされるが、蘇軾が登つたのは前者、すなわち徐州にあつた戲馬台の方である。

*「路失」の二句：蘇軾の七言律詩「與舒教授・張山人・參寥師同遊戲馬臺、書西軒壁、兼簡顏長道(舒教授・張山人・參寥師同に戲馬台に遊び、西軒の壁に書し、兼ねて顏長道に簡す)二首」其一の頸聯。

*玉鈎：「玉鈎」は、勾玉。ここでは戲馬台の下にあつた「玉鈎斜」という名の道を踏まえるとされる。勾玉のように曲がつた道であることから名付けられたのであろう。ただし、「玉鈎斜」があつたのは、揚州廣陵郡の戲馬台の方であつて、蘇軾が登つた徐州の戲馬台ではない。

*芳草合：香りのよい草が一つに合わさり周囲を覆い尽くすこと。清・王文誥の『蘇軾詩集』卷十七の注に、以下のように言う。——猶言、臺下之路、悉爲芳草所合、不見如鈎之形而已。(猶ほ、台下の路、悉く芳草の合する所と爲り、鈎の如きの形を見ざるを言ふがごときのみ)。

*「林亡白鶴」の句：陳師道は、この句の「白鶴」について、蘇軾が「玉鈎斜」と同じく揚州廣陵郡にあつた「白鶴宮」を詠つたものと解釈していたようで、さらに本節の後半でそれが誤用であることを指摘する(「*唐高宗東封く名以白鶴」を参照)。ちなみに、『揚州府志』卷二十八の「白鶴宮」の項目にも、『後山詩話』の本節が引用されている。

* 廣陵亦有戲馬臺、號「玉鈎斜」：「廣陵」は、江蘇省江都県。北宋の行政区分では揚州に属した（北宋・王存『元豊九域志』卷五）。陳師道がここで揚州廣陵郡にも戲馬台があり、その下に「玉鈎斜」という道があったことに言及しているのは、徐州の戲馬台で作った詩に、「玉鈎」が詠われていることの不適切さを示そうとしたからであろう。

* 唐高宗東封、名以白鶴：「東封」は、東方の泰山で封禪の儀式（天に対する祭り）をおこなうこと。唐の高宗が泰山で封禪の礼を行ったのは、麟徳三年（六六六）春正月と言う（『舊唐書』卷五「本紀第五・高宗下」、『資治通鑑』卷二〇一）。「老氏」は、老子のこと。老子は、姓は李、名は耳と言われている。唐の皇族は李姓であることから、同じく李を姓とする老子を尊んだ。唐の高宗は封禪の儀式を行った折りに、鶴が舞い降りてきたので、諸州に詔を出し、白鶴という名の道觀を築かせたとあるが、徐州の「白鶴觀」もまた、おそらくはそのうちの一つであろう。北宋・陳師道の「徐州白鶴觀記」に以下のように言う。——徐山不泉、州治之南、有平泉焉、深明潔甘、早潦自如。說者曰、泉有鶴下、故名。（徐の山に泉あらず、州治の南に、平泉有り。深明にして潔甘、早潦 自如たり。説く者曰く、泉に鶴の下る有り、故に名づく、と）。——陳師道がここで唐の高宗が築かせた「白鶴觀」について言及したのは、蘇軾の詩の「白鶴」に対して、本来ならば徐州の「白鶴觀」の方を踏まえるべきであった、揚州廣陵郡の「白鶴宮」を踏まえるのは適切ではない、ということを示そうとしたからであろう。

* 公蓋誤用：陳師道は、徐州の戲馬台で作った詩に、揚州の戲馬台に縁のある「玉鈎斜」と「白鶴宮」が詠われるのは不適切であり、蘇軾の誤用であろうと指摘する。ただ、蘇軾の場合、黃州の「赤壁」に至った折りに、そこが三国時代の古戦場であった「赤壁」とは別の場所

と知りながら、三国時代の故事を踏まえて「前後赤壁賦」を作ったという例がある。よって、「玉鈎斜」と「白鶴宮」についても、蘇軾は徐州の戲馬台ではなく揚州廣陵郡の戲馬台に縁のある古跡と知りながら、あえてそれらを用いた可能性も考えられる。

なお、この二句については、「玉鈎」を単に「勾玉のように曲がった道」の意と、「白鶴」をそのまま「白い鶴」の意と、それぞれ捉え、「勾玉のように曲がった道が見えなくなったと思つたら、香り草が一つに合わさり道を覆いかくしていた。白い鶴が舞い降り林の木々に隠れるところ、野の泉が清らかにその水を湛えていた」と眼前に広がる風景を単に描いたものとしても十分に解釈することができるであろう。

* 所取信：信用される、の意。「所」「取」は、いずれも受け身の意を表す。

【通釈】

眉山出身の蘇軾先生が徐州の知事であったとき、かつて客人たちと項羽が建てたとされる戲馬台に登つて、詩を作つて次のように言つた。「玉鈎という名の道が見えなくなつたと思つたら、香り草が一つに合わさり道を覆い尽くしていた。白鶴という名の宮が林の木々に隠れるところ、野の泉が清らかにその水を湛えていた」と。揚州の廣陵郡にも戲馬台があり、その下に「玉鈎斜」という名の道がある。唐の高宗が東方の泰山で封禪の儀式を行つたとき、鶴がこの地に舞い降りてきた。そこで諸州に詔をして老子のために宮殿を築かせ、白鶴と名付けさ

せた。どうやら蘇軾先生は（徐州の戲馬台での詩に、揚州の戲馬台に縁のある玉鈎斜と白鶴宮とを）間違つて用いたものと思われる。そして後にそれが信じられるようになってしまった。それゆえはつきりとさせておかないわけにはいかないのである。

（次号に続く）